内面的に堀下げて、われらの前に提示して見せた。荘十二は常に努力の最後の一點で敗れ去る未完成作品に終始してゐる。僕は、彼の「河向ふの青春」以來、何がなし彼に心惹かれて、常に次々をと期待してゐるのであるが、この作品では、スピイディな運びに彼の腕のよさを見、特に村の公會堂の落成式の場面、村民のカラユキさん罵倒による混亂の美事なさばき方には、思はず拍手を送らずにゐられなかつた。だが、この作品でも、彼は途に投げをうつてしまひ、自分も土俵を割つてしまつたのだ。もと〳〵彼には粘りといふものが缺けてゐる。彼のよきリアリズムは常に最後で、恰度根負けしたやうに潰れおちるのである。それは又、個々の場面にさへ指摘出來るのである。最後の場面での「アントンさん」の呼び聲へのこだはり方は、彼がどうにかして幕にしてしまはふとする投げである。さうして、彼のからゆきさんへの内面的追及からは、てもなく身をかはしてしまつてゐるのである。しかし、僕は依然として彼に期待をつなぐだらう。それは、何といつても、この國の監督中心で、創作の意欲に燃える逞しさを持つ少數者の一人が彼だからである」と。なほ「目擊者」について激賞的な言葉を書いてゐるが、ここには省略することとしよう。

前後するが『モダン滿洲』十三年五月號に私は「文藝展望」の一文を書いてゐる。

最近滿洲に於ける文學行動が異常に活氣を帶びて來たことは明瞭な事實である。此の事は日本人が此處で書くものについても滿人が書くものについても言へるのである。

これは建國後すでに相當の年月が經ち、此處に住む人々が一應の落ち着きを得て來た證左でもあらう、官遊的方面等に於いても、文藝文化の問題に對して相當の關心を拂ふやうになつて來たことが指摘出來る。例の民生部大臣賞の設定などもその一例である。

ただし注意すべきことは斯うした官遊的關心などに、全幅の信頼をかけて、この國の文化の問題が悉く盡されるなどといふ考へを持つべきでないといふことである。由來日本に於いても、滿洲支那に於いても、優れたる文學は實に人民の側から生れて來たものなのである。この事は現在の滿洲に於いてもあてはまるのだ。

× ×

さて具體的に見よう。纏つた形で文學の仕事を精力的に發表しつゝあるものとしては、『新京文藝集團』『作文』等をあげるべきであらう。もつとも、彼等の業績に相當のムラがあることは免れない。最近のものとしては後者に於ける高未恭遣の「新興國」が注目される。

次にこれらのグループの外に在つて諸新聞雜誌に活躍してゐる連中がゐる。北村謙次郎、今村榮治、今村久米子、由下明、椿紗雪、多木羊子、波多優その他である。兎に角作家は書くことが肝要だとみんなについて言ふことが出來よう。

詩、短歌、俳句等の諸集團もあるがこゝにははぶく。

滿人の文學について書きたい。

彼等にとつての不幸は、作品發表の舞臺が甚だ限られてゐることである。

これは實に滿洲國の不幸でもあると言はねばならぬ。新聞は著しく數が減つた。雜誌として見るべきものは今のところ『明明』と『新青年』くらゐである。それも一部の特定的な作家群に占領されてゐる傾向があるやうだ。

作品は色々と現れてゐる。滿洲の現實をいきいきと描き出さうとすることに努力が拂はれてゐるのを知り得るのは欣ばしい。なほ技術的には缺陷、未熟の點もあらう。これからは適切な改善策を講ずべきである。さきに計畫された滿洲文藝協會がどうなつたかを筆者は知らないが、斯うした方面でそのなすべき仕事があることを思ふのである。

――右を見ると、この頃にも別に「滿洲文藝協會」の計畫があつたらしい。尤も、滿洲文話會はすでに前年の夏出發してゐるのだから、それを更に擴大發展させようといふ案を指してゐたのかも知れない。

右の一文に出て來る人物のうち、北村謙次郎については今や周知の所だが、當初は『滿炭』などにかて、『滿洲行政』等にも作品を出すやうになつたのだつた。

今村榮治は、私は新京日日を緣として知つたのであつた。やがて、新京文藝集團の同人として活躍した。何處かの物置みたいな所で深夜燈をつけて原稿を書いてゐてボヤを惹起し大火傷を負つたといふ如き、文學に憑かれた彼の姿を語る逸話であらう。

今村久米子も新京日日で登場した。當時ダンサーで、夫君は彫刻家だつた。『滿洲行政』にも書いてゐる。

由下明は滿映にゐた愛すべき文學青年で、熱情を持つた朝鮮藝術の支持者だつた。新京日日にもよく書いた。彼が編輯した『滿洲映畫』は若い彼の熱情と才能を傾けた記念品だと言へる――と言ふの

は、彼は長春座が燒けた時、折惡しく座内の友人の部屋に泊り込んでゐて、無慘な死を遂げたからである。

椿紗智は天理教にゐた人で字のうまい人だつた。

波多徳は山田哲――後年、童話集『まーちよ』を出してゐる。

次に、『モダン滿洲』八月號の文藝匿名時評の作品評の部分を寫して見よう。

文藝集團第六輯

『文藝集團』はこの集から隔月刊定期刊行物になつた。そしていよ〳〵同人雜誌としての體裁だけはとゝのへて來た。

先づ新人矢戸貫一郎、「空しき部落」、長篇の一部であり未完であるが、これはこれだけでも十分面白く讀ましてくれる。

筋も面白いし、筆も立つ樣である。只素材が內地の田舍で、少くとも明治年間のものである。作者は最近渡滿しただけだそうだが、今暫らく、滿洲に生活し、滿洲を題材にしたものを書いてもらひ度い。

作者はどこまでも通俗作家である。通俗物で結構、次の活躍を期待する。

傍點のあまりに多いのはキザだし、わざとらしいルビは却つて讀み難い。

大脇一雄「洋火工」、これも未完だから批評は差控へるが、これは山谷三郎が生前よく書いた勞働者である。

下級勞働者である、洋火工が鋸に嚙まれて殉職する。その後に殘つた女房と六人の子供達の生活苦、工場は機械を買ひ入れねばならんから今は一錢の金も惜しいからと慰藉料を拂はうとはしないしその買ふと云ふ機械が入れば何十人かの職工の職を奪ふ事になる。

そこに資本家と勞働者との對立が出來てくると云つたものだが、最初の說明が少し冗長に過ぎないだろうか。

何にしても少年大脇の熱心な態度とその精力的な筆を買はう。

奥一「大地の歌」これは創作じやない。一つのルポルターヂュであり農村風景のスケッチである。前々號の「天使は欠伸する」と云ひこれと云ひ輕文學家としての作者のもう一つの片面としてこうした純滿洲物に手をつけ出しを事は喜ばしい事であるが、いづれもまだ習作時代である。次の作を待つて批評しよう。

通讀して今ノ『文藝集團』ではまだ國都を代表する同人雜誌三三ふ域にはまだ遙か遠い感がある。表紙裏に刷り込んであるメンバーの中には、錚々たる顏ぶれを揃へてゐるが、その人達の出馬を待つてゐる。

『滿洲行政』七月號には三つの創作がある。富川靖「廣場」、これは明るい潑剌とした青年滿洲の姿である。新緑の廣場（希望に滿ちた）と八方に擴がる道路（國威とでも云ふふ）へインケルンと協和青年の雄叫び、そしてその時、この土地の延長であるどこかでは歷史的な、地圖の色が塗りかへられてゐるんである。輕い筆致と巧妙な技巧はなか〳〵立派なものである。

今村久米子「出發」、これは不健康な小說である。不健全な結婚生活をしてゐる女が家出する書き出きである。

こんな女はきつと新しい生活への「出發」でなくて、恐らく北滿を流れ歩く淫賣婦にでもなるのだらう。前の「廣場」の明朗さにくらべていゝ對照である。

島田清「隘衢」、筋は平凡な、小市民的な家庭生活を扱つたものである。

只筆が飜れてゐるだけで讀ませる小說である。

今月の國都の文藝界はゞこれゞと云ふ大物も出なかつた。何となく夏枯れを思はせる淋しさである。

――ちなみに、山崎三郎はお名を山崎といひ、產業部にゐた若い技術家であつた。『商業』に多く書いてゐる。奥一と親交あり、私ものちに彼と交りを結んだが、昭和十三年一月十日、三十歳で、愛妻愛兒をのこして死んだ。遺作「採炭夢」が『モダン滿洲』同年五月號に載つてゐる。北支の炭坑勞働者に取材した。異色ある小說である。

（本書校正中に分つたことであるが、モダン滿洲八月號の匿名批評W・G・Wは奥一であつた、彼はモダン滿洲五月改題號から廢刊に至るまで終始編輯に從事した。）

なほこの年一月、若い詩人甘粕滿が自殺してゐる。

第十五章　滿洲文話會が出來て

滿洲文話會について書くべき順序となつた。

滿洲文話會ははじめ大連で發祥したものである。昭和十一年の夏だつた。

『滿洲文話會通信』の第一號は同年九月十五日に出てゐる。それによれば、七月、八月、大連では例會が開かれ、七月には隨筆集『實驗簿餘白』を出した紫藤貞一郎博士が「文學と醫學」について語つてゐ、出席者に井上麟二、橋本八五郎、西村眞一郎、岡一郎、奥行雄、川口彦太郎、覓太郎、吉野治夫、瀧口武士、中島新、八木橋雄次郎、藤井圖夢、秋原勝二、城小碓、田川亮、坂井艶司、福家富士夫、上村哲嗣等が見え、八月の會では絲山貞家、大谷健夫、大野斯文、横澤宏、高尾憲太郎、松畑優人、青木實、坂口千馬太、平井孝雄、島田幸二、小山田忠男、秩父忠敬、古屋重芳等が加はつてゐる。

なほ新京では八月、支部設立を議し（その參會者は、堀善照、椿紗智、奥一、今村久米子、曉野重明、大坂嚴、高木喜久藏、今村榮治、江草茂、竹田讓、桃北好澄、大内隆雄、今井一郎、宮川靖）、宮川、今井、大内が委員に決した。その後、北村謙次郎、武本正義、美濃谷善三郎、山川博、佐藤四郎、夏本草朗、池邊青拳等が加はつた。

またこの頃、G氏文藝賞委員會では『滿洲文藝年鑑』第一輯刊行の仕事を進めてゐた。また、三宅豊子の歌集『七草』が東京のあしかび社から出版されてゐる。

昭和十三年一月の全會員の名を擧げてみよう。

大連　伊藤順三、井田透三、井上麟二、井上一郎、石森延男、池田孝、絲山貞家、濱田篤一郎、西村眞一郎、富田充、大野斯文、大島清明、江野想、川口彦太郎、香川末光、覓太郎、甲斐水棹、横澤宏、吉野治夫、高尾憲太郎、高山峻峰、田中總一郎、武田一路、田川亮、武田勝利、瀧口武士、津田維福、橋原健三、八木橋雄次郎、抑生昌勝、松畑優人、古川哲次郎、福富青生、藤井圖夢、藤井千鶴子、青木啓、青木實、秋原勝二、齋藤欣志郎、坂口千馬太、三溝又三、城小碓、島田幸二、進藤智惠子、田中武夫、大脇武夫、奥行雄、奥藤多藏、長濱哲三郎、中溝新一、中島新

三井正美、三好弘光、水口義博、斎藤貞一郎、島屋進治、遠藤武之輔、甲斐雅人、横内國次、鈴木兵衛、島崎恭爾、永原いね子、長谷川四郎、橋本末喜、林一郎、竹内晋、宮島正美、大下三雄、下田孝雄、上田淳一、石田貞助、加藤二郎、古屋重芳、秋父忠敬、坂井艶司、渡部榮、細井常夫、加藤節明、長谷川晋、和原東一、大谷健夫、平井孝雄、鹿島鳴秋、富田且、藤原定、大岩鉴吉、吉田智貞智、中川潤、福家留士夫、

新選　今井一郎、大内隆雄、宮川靖、西田猪之輔、三井貞雄、桃北好浚、北村謙次郎、堀善照、結紗智、今村久米子、奥一、武本正英、竹田義、山川博、佐藤四郎、夏木草朗、大坂晨、今村榮治、高木喜久蔵、堀野重明、美濃谷善三郎、落合都郎、坪井與、松本光晋、佐々木勝造、藤山一雄、池邊青季、江草茂

長天　富田靖、石原長徹、加藤都哉、羽室長靖、小杉茂樹、三宅豊子、白井尚子、平野博三、宮井一郎、大嶽武年、林重生、

農報　伊東宏俊、伊東千鶴子、菱田正孝、森脇溪治、矢原禮三郎、島田のはぎ

吉林　志賀清一、村谷周三、小池亮天

塹壕　吉賀友甫、竹内節夫、城島舟禮、砂見爽

その他　上野凌磐、吉田孝一、島田清、高木恭造、松原一枝、岡二郎、川上旗男、西島貞子

哈爾濱　竹内正一、近東綺十郎、古川賢一郎、荒井重美、相川潔、日向伸夫、渡邊伸、宮永節子、渡邊たけの

昭和十二年末頃、新京で『白想』といふ文藝同人雑誌を出さうといふ計畫が進められた。その同人たるべき連中の顔觸れは次の面々だと報ぜられた。

赤川孝一、岡田益吉、一谷清昭、飯田秀世、牛島春子、今井一郎、木崎龍、今村久米子、木島、阿部好雄、北田良平、磯部秀見、杉村勇造、美濃谷善三郎、高田憲吉、藏原周、長谷川潔、長谷川四郎、高宮粲、武藤直男、坪井與、三枝朝四郎、野澤榮二、矢原禮三郎、藤山一雄、北村謙次郎、佐藤玫郎、近藤伊與吉

これを見ると、大體の見當はつく、新京文藝集團が在野人の團體だつたとすれば、『白想』は官邊、滿映あたりの連中を集めようとしたもの笑つた。だが、この『白想』はつひに刊行の運びに至らなかつた。

この頃、詩誌『鶴』の活動めざましいものがあつたことが追想される。

十一月下旬、大連では文話會懇親會を兼ねた『滿洲に於ける文學活動』同願座談會を催してゐる。その要點速記が『滿洲文話會通信』第四號に出てゐるが、これは粗雜な、誤謬の多いものであつた。

奥一が『與太もんのマンシュー』を出したのもこの頃。收むる所、「孤は死んだら何を殘すか」「秋のアパートの住人たち」「曇り後晴」「ザハロフさんの話」「秋と長屋のお神さん」「マルーシヤと云ふ女」「フラフラ行進曲」「空想部隊」と表題の作。何れも、彼らしさをよく示した作品だつた。

甘地滿追悼詩集『靈振』（大連、裸跣詩社）、『水師營』（島崎恭爾の小說「風」、宮本のぶの隨筆「裴益」、城小確の詩「待避線」を收む、大連詩書倶樂部）等もこの頃に出てゐる。

昭和十三年三月には、文話會と大連放送局の協力により詩の朗讀の放送が行はれた。詩作品は高木恭造、城小確、井上鱗二、富田充、古川賢一郎、北川冬彦、安西冬衛、瀧口武士、小池亮夫、落合郁郎、八木橋雄次郎等のもの、朗讀者は瀧口武士、絲山貞家、千種光子、松本美穗等であつた。

昭和十三年初夏には、近東綺十郎が哈爾濱から北京に移つてゐる。

七月には滿洲歌友協會が生れてゐる。

その年八月、新京文藝集團の刊行物は第六號ともつて終焉した。

多木羊二の作品集『青き夜の醫師』がモダン滿洲社から刊行された。

大連詩書倶樂部は『普蘭店』を出した、島崎恭爾、宮本のぶ、三宅豐子、城小確のものを收めてゐる。

竹內正一の『氷花』が作文發行所から出た。

『滿洲文藝年鑑』第二輯は昭和十三年末、滿洲文話會によつて編纂され、滿蒙評論社から刊行された。

その內容は次の如きものであつた。

概觀　西村眞一郎

評論　大谷健夫

小說　城小確

詩壇　甲斐水棹

和歌　高山峻峰

俳句

兒童文學　石森延男

評論

滿洲文學の精神　城小碓
滿洲文學に就て　角田時雄
當爲的と自然的　大河節夫
建設の文學　木崎龍
幻想の文學　加納三郎
滿洲文學の特有性　金崎利光
滿洲文化の文學的基礎　上野凌磐
東洋の猶太民族　西村眞一郎
滿洲に於ける文學の方向　川上旅男
滿洲文學運動の主流　佐藤四郎
滿洲文壇の回顧　古川哲次郎
最近の國文學研究思潮につきて　渡部榮

川端康成論　大谷健夫
チエーホフに於ける「場」原　榮藤貞一郎
「天才論」批判の序章　西川清六

詩

黃河　高木恭造
戲蝶　井上麟二
蝶の宿　城小碓
天邪鬼一　古川賢一郎
湯　小池亮夫
詩歌百科辭典　三好弘光
七月の夜の夢　古尾重芳
蟬の歌　坂井艶司
巷北斷章　矢原禮三郎
巡禮　甘地滿

鴉　小杉　茂樹
小說
手記　吉野　治夫
一農夫　青木　實
夜の話　秋原　勝二
西喇木倫河　福家富士夫
ある少年の記錄　木崎　龍
泥家　鈴木啓佐吉
老家行　長谷川四郎
滿洲の受胎　工　清定
隣一二軒　町原　幸二
逃亡　今村久米子
母へ　西川　清六
桔梗の李節　松原　一枝
安東　島崎　恭爾
幾山河　富田　壽
流離　竹內　正一
短歌
事變は進む　甲斐　水棹
栗原大尉　富田　充
離心抄　荒川石楠花
旅順　伊藤千鶴子
年若き僧　香川　末光
雨と滿人　新井　重美
激流渡舟　相川　澪
苦力　宮島　正美
吾兒　樺田　正東
北支事變抄　永原いね子

俳句
南嶺　三溝沙美
新京　三木朱城
氷山　高山峻峰
不毛の地　久米幸叢
春天　石原沙人
月　金子麒麟草
春耕　江川三昧
柳絮　徐鵬襄治
春聯　青山靜丘
隨筆
蔦の實　筧太郎
暑怒哀樂帳　橋本八五郎
仕掛花火　石森延男
深谷温泉にて　竹内節夫
川柳と滿洲　石原農徹
秋の隨筆　三溝沙美
雜錄（略）

これが翌年の『滿洲文藝年鑑』第三輯（これは滿洲文話會で發行した）では、次のやうな目次となつてゐる。

概觀　西村眞一郎
評論　青木實
小說　八木橋雄次郎
詩　綿山貞家
劇　金子麒麟草
短歌

俳句　柳生昌勝
兒童文學
評論
最近の滿人文學　大内隆雄
決算と展望　林適民
滿人ものについて　青木實
藝術と職業　井上麟二
國策文學論　上野浚嶠
滿洲文學雜考　古川哲次郎
滿洲文學理論の整理　西村眞一郎
詩論　八木橋雄次郎
肉體の惡魔　三好弘光
日本古典主義文學における女性描寫覺え書　太谷健夫
とりかへばや物語について　渡部榮

火野葦平論　木崎龍
室生犀星の圖　宮井一郎
滿洲雜誌論　加納三郎
隨筆
沿線人種　秋原勝二
日記とカレンダー　紫藤貞一郎
水野さんの話　三宅豐子
隨想　木原鐵之助
大晦日　大岩峯吉
歸鄉雜記　加納三郎
朝鮮見たまゝ　山崎元幹
競馬と子供　鹿島鳴秋
暴風雨の前と後　金崎賢
哈爾濱の憂鬱　排北好澄

廢墟、寬城子村の記　加藤郁哉
雪だけは頭髮に肩に　石森延男

詩

日本島畝圖　瀧口武士
建設工事　古川賢一郎
一輪車　八木橋雄次郎
棉畑　城小碓
鴉の詩　高木恭造
馬の詩　小杉茂樹
インテリの歌　三好弘光
解氷期行情　西原茂
雪の朝　落合郁郎
やどかり　宮下秀雄
燭、　太田正

窮乏せるアポロ神の詩　故甘地滿
蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて　井上靖二
廢港　横澤宏
沙漠の植物　坂井艷司
權兵衛和讃　松畑優人
五月の風の中で　矢原禮三郎
航海船　藤原定

短歌

冬雜詠　相川澤
身邊　安倍喬
白き太陽　新井重美
現實　荒川石楠花
興亞　伊東千鶴子
土　小川皓司

出發　香川末光
聖戰二歲　故甲斐水棹
重寶　甲斐雍人
夏日抄　神山哲三
送別　木田晴夫
戰傷の友　樽田正東
明暗　島田のはぎ
戰況　鈴木濟
哈爾濱　高橋房男
春雜　武田尊市
南京陷落　津田八重子
母逝く　寺本初音
事變下吟　富田充
楡の林　富永幸子

一首一題
金剛山そのほか　中島新
無題　西田猪之輔
夜の青葉の演奏　橋本淺夫
思靈塔大祭　平山斌
秋冷　故平山登志夫
鬣　三井實雄
淺茅が原　宮島正美
俳句　桃北好澄
伊太利親善使節を滿洲へ迎へて
雜詠　高山峻峰
軍旅餘詠　石原沙人
滿洲四季　栗生純夫
四季　森脇襄治
志和斗史

雜詠三句　三木朱城
雜詠　金子麒麟草

小說

同行者　今村榮治
蘇へる花束　長谷川潛
生地　北村謙次郎
土龍　鈴木啓佐告
雪室　牛島春子
雪子　吉野治夫
きち　三宅豐子
馬家溝　福家富士夫
窓口　日向伸夫
齡　富田壽一
天使は欠伸する　奥

空しき部落　宍戸貫一郎
雪の日　島崎恭爾
村會　上野凌磐
小さな石　近東綺十郎
風　横田文子
ギルマンナパート詰描　竹内正一
秋の頃　青木實
滿洲の胎動　土清定
アリョーシヤ　山長
人造絹糸　小松

雜錄（略）

なほ、この本により、滿洲文話會、滿洲歌友協會『作文』のほかに、『滿洲浪曼』（後述）、『學文志』（後出）や下記諸團體があつたことが知られる。

○『鵲』（大連）同人――松畑優人、小池亮夫、宮下秀雄、三好弘光、西原茂、瀧口武士、井上麟

一、八木橋雄次郎

○撫順文學研究會（『斷層』不定期刊行）、會員――相原繁、今井修二、東郷里枝、鶴田和平、竹内節夫、母里山正夫、西澤千之、松本亞士、不二亨、市來一郎、梶原貞次郎、安藤一明

○『二〇三高地』（大連）同人――島崎曙海、川島豐敏、舟木由岐

○『文學地帶』（新京）同人――今村榮治、大脇一雄、太田正、高木喜久藏、酒井悅子、宍戸貫一郎、篠原捷三、下島甚三、庄野ふみ、廣中一雄、桃北好澄

○『滿洲文學』（新京）同人――草川千章、志賀修、ささきつや、堀善照、遠藤美津雄、熊城次、佐和山一郎

○アカシヤ短歌會（大連）主宰者　甲斐雍人『アカシヤ』刊行

○滿洲郷土藝術協會（大連）代表者　香川末光『滿洲短歌』刊行

○滿洲短歌會（大連）主宰者　西田猪之輔『合萌』刊行

○滿洲歌話會（哈爾濱）主宰者　三井貫雄『滿洲歌人』刊行

○北滿歌人社（哈爾濱）主宰者　相川澪『北滿歌人』刊行

○平原俳句會（大連）機關誌『平原』

○大連俳句會（大連）機關誌『滿洲通信俳句』

○滿洲俳句會（大連）機關誌『滿洲』

○營口俳句會　主宰者　古川而作　機關誌『白豚』

○滿洲石楠縣盟（奉天）機關誌『山楂子』

○哈爾濱學院黑水會　主宰者　佐藤青水草　機關誌『糧塑』

○滿洲新短歌協會（大連）機關誌『短歌開拓』

○新俳句聯盟（大連）

○滿洲番傘川柳研究會（奉天）

○川柳大陸社（奉天）

○國都吟社（新京）

○大連川柳社

なほ右年鑑で甘地滿のほかに、甲斐水棹、平山登志夫が故人となつてゐる。平山登志夫は昭和十一年來新京神社に在り、十四年急病で死んだ、『滿洲歌人』八月號は彼の追悼特輯であつた。甲斐水棹女史の死は昭和十四年五月。

戰ひはすぎて久しき巖山の
　起き伏しさやに澄むそらの色

この歌を刻んだ大連中央公園山の茶屋中腹の女史の歌碑除幕式が前月に行はれたばかりであつた。なほ當時の新聞文藝欄を語る一資料として、「モダン滿洲」康德六年一月號から佐々木勝造の「新聞文藝欄展望」を左に寫して置く。

大連から奉天へ、本社機構の移轉を契機として「滿日」の學藝欄がどう動くかは、頗る興味を惹く問題であつた。

而してこの「滿日」の奉天進出は、從來その姉妹紙的存在であつた「奉天日日」を合併すると共に十二月一日を期して愈々實行されたが、關東州內一圓に對しては、本社機構の奉天移轉完了後も引續き大連支社に於て從前通り「滿日」を印刷發行するといふことになつた。卽ち、奉天本社では全滿向きの「滿日」を、大連では關東州一帶を主とした「滿日」をそれぞれ別々につくることになつたわけである。

しかし、それまでに屢々巷間に傳へられた如く、結局、この「滿日・學藝欄」だけは分離移動を見ず、依然として大連に於て全滿共通の編輯整理が續行されてゐる。

あらゆる意味で、かつての滿洲文化の母胎であつた大連を中心として「滿日・學藝欄」が傳統的に其の地盤を固めて來たことは、今更繰返すまでもないが、中樞機構の奉天移動といふ「滿日」自體の重要な轉換期に當つて、舊學藝欄陣容の引續き大連存置も勿論必要にして且つ意義有る事乍ら更に積極的に奉天本社に於ても新學藝欄陣容を設置して、奉天と大連兩者が各々其の特異性を發揮しつゝそれぞれの學藝欄をつくつて行く傍ら、絕えず學藝欄相互の文化的交流を圖る事も、寧ろより以上有意義で「滿日・學藝欄」自身の發展活動を一層助長するものと考察される。無論これは人的にも技術的にも種々なる關係から、早急に實現を望むことは困難であらうが、日本に於ける「大每」「東日」或は「東朝」「大朝」的な、この「滿日」の體制が暫行的なるものでない以上、滿洲の文化的特殊性から言つても、將來充分に試みらるべき問題として殘されよう。

○

最近各紙學藝欄の著しい動向は滿洲に於ける農民文學の問題に關する提議、檢討、論議が盛んに行はれ出したことであらう。これは日本に於ける「農民文學懇話會」をはじめとして和田傳、島木健作等の農民作家の來滿が、其の拍車を加へたことは事實であるが、言ふまでもなく此の農民文學の問題は、滿洲に於て當然提議され、檢討され、論議されなければならぬ大きな問題であつて今後

益々必然的に滿洲農民文學は各紙學藝欄を飾る旺盛な課題とならう。

「滿洲にこそ農民文學」といふ「滿日」皮下注射の提唱。同じく「滿日」で湯淺克衛の「先驅移民」を中心に秋原勝二氏が論及した「思考の距離」「農民文學新動向」探求を試みんとした「滿洲新聞」吸取紙。又「哈爾賓日日」に於ける青木實氏の「滿洲文學の所在」を滿洲農村の文學に追究した所論等々。各紙共に何れも時宜に卽した取上げ方であつた。

○

文藝時評は、西村眞一郎氏が滿洲に於ける作品批評を「滿日」で行つたが、他紙には無し、滿洲現地の作品を中心とした文藝時評は各紙一齊にもつと頻繁に取扱はれるべきであらう。

演劇の分野で大同劇團の森斌氏が「滿洲新聞」に「日本公演を終へて」の報告をなすと共に其の自己批判並びに劇團の進むべき方向を檢討した一文は、協和劇團の上原篤氏が「奉天每日」に國家的意圖の下に協和運動の一翼として發展すべきこの國獨自の演劇文化を論じた「滿洲新劇運動の出發と其の特異性」と對比して、多分に興味と注目を惹くものがあつた。

小說試論として現代文學の一人の鬼を俎上に上した木崎龍氏の「火野葦平論」（滿日）破壞と建設の渦中にある現代中國文學の苦鬪と更生の姿から「若い方の支那」に眼を投ぜよと言ふ「滿日」

皮下注射、そして「滿洲新聞」の蘇星氏に依る「知識人の任務と東洋」は、それ〴〵の觀點、立場から事變下の時局を濃厚に反映してゐた。

又、竹內正一氏の「途上に在る宿命の文學」（哈爾濱日日）、青木實氏の「職業作家と素人作家」（滿日）は、共に滿洲に於ける文學運動の歷史的發展の特殊性を論じ、殊に青木氏が滿洲にこそ素人作家のより多くの輩出を必要とする事を熱望した「職業作家と素人作家」なる評論は、滿洲に於ける素人作家の位置、役割に確信を持つて其の意義づけを行ひ、幾多の問題を提示した。

○

滿洲文學界一ケ年の回顧は、大內隆雄氏が「新京日日」に、古川哲次郎氏が「滿日」に書いたが大內隆雄氏も言ふ如く「新京日日」が學藝欄の殆ど大半を割いて繼續した滿人及び中國人作家の作品の翻譯紹介は、獨自の燒彩を放つて大きな功績を殘したが。滿洲の土に根ざした農民文學の問題に相呼應して、この努力は將來更に一層續けられて欲しいもの。

登場間もない「哈爾濱日日」「奉天日日」學藝欄も、各々特色ある新生面を開拓しつゝ漸次其の內容充實を堅實に示して來てゐるが、「哈爾濱日日」は坪井滋氏のラヂオ・ドラマ放送台本「拓けゆく沃土」に學藝欄全スペースを提供する等、頗る張り切つてゐる。（五・一二・一三）

第十六章　「原野」刊行の頃

昭和十四年になると、日本文學人の來滿が目立つて來た。十三年の秋から冬へ、林房雄、和田傳、打木村治等が來、十四年には寺崎浩、阿部知二、眞船豐、島木健作、伊藤整、湯淺克衛、田郷虎雄、福田清人、田村泰次郎、近藤春雄、今日出海等が來た。

滿洲文話會では七月二日、大滿協和會館で創立二周年を迎へての定期總會を開き、同夜左の演題と講師で文藝演會を開催した。

日本文學と滿洲文學に就いて　木崎龍

滿人文學に就いて　大內隆雄

小說に於ける親と子　上村哲彌

右の總會で、文話會本部を新京に移すことを決定した。

その後の來滿者に山田清三郎、小田嶽夫等がある。

刊行書では坂井艷司の詩集『崖つぷちの歌』町原幸一の隨筆小品集『是好日』（以上は作文發行所から）、加藤都哉の『滿洲こよみ』、島崎曙海の詩集『地貌』等が出た。

九月、上村哲彌氏は第一公論社を創設すべく東京へ去つた。

八月末に新京文話會は滿洲文化映畫の夕を開催、九月十八日には新京陸軍病院へ傷病兵慰問映畫會を行つた。

その內、大內隆雄譯編『原野』が黃色つぽい圖案の表紙で東京の三和書房から出た。『原野』は幸ひ各方面で評判となつたが、こゝに木崎龍が『滿洲文話會通信』に書いてゐる「『原野』について」を引用してみよう。

『原野』は、古丁氏以下九人の作家の十二篇の作品を集めたものである。私は此處でそれらの一つ一つについてのべる場所をもたないし、ましてや其處から何らかの滿洲文學への基礎づけをひきだ

すことは斷念しなければならない。只、この著作集が、文話會員は勿論のこと、すこしでも澤山の人の眼にふれ、何らかの形で問題にされ、やがてはより飛躍した段階へ吾々の文學活動をひきあげて行くよすがともなればいいと、心から思ふのである。

文話會で、吾々自身の作品ばかりでなく、いやそれ以上の興味と期待とで、滿系作家の文學が問題にされてゐたのは、決して最近のことではない。しかも、言語の障碍のために吾々の多くがそれらに親しく觸るることが出來ず、從つて古丁さんなどと話しても、表面的な堂々巡りばかりで、そこから掘りさげて、つつこんで話し合ふといふ所までゆかず誠にいらだたしく物足りない想ひであつた。だから、吾々もうんと支那語を勉強して、などと古丁さんたちと笑ひあつたりするのが落ちだつたのだが、それとて急場の間にもあふことではなかつた。結局、吾々の唯一の「通譯」たる大內氏の譯業が、さうした問題を埋める據り所となつてゐたのだ、昨年の秋頃から、作品集の話が具體化し吾々は双手をあげてその企てを歡迎し、大內氏の顏をみるごとに未だかまだかと催促する始末であつた。大內氏はその度に、自分が出版書店であるかのやうに、溫顏を澁くして、ううんと大いに困つてゐたのである、それが、やつと出たのが、この『原野』である。欲をいへば滿洲で出版したかつたのだが、それもいつて詮ないことである。要は多くの人々の眼について眞面目に讀まれてくれることである。

滿洲の作家といへば、蕭軍などもその一人だが、彼も今では中國の作家としての方が有名だし、何よりもまづ、吾々と手を握つて歩みを共もにしてくれてゐる古丁氏以下の人々の方が、親しみも深いのである。この人たちについては、先だつての大連の文藝講演會で、大內氏が一々作家をあげ紹介されたし、私も今は蛇足を省くことにしよう。一讀して、全體の感じがひどく暗いことと、流れに唐突さがあり人物がぎくしやくしてゐることが眼につくけれど、そこにこの人たちの大きな惱みもあることがおもはれ、吾々はその意味でも、お互にしつかり結びついて、少しでもさうした苦惱をきりひらいて行きたいと思ふのである。かうした仕事は、文話會のこれからの仕事ともならうが、とりあえずこの九人の作家の御健闘を祈り、大內氏にありがたうを言ひたいのである。

（文話會通信二六號）

『原野』は日本でも甚だ評判になり、先づ岡田三郎氏が『日本評論』の匿名時評で取り上げ紹介した。次いで、大陸開拓文藝懇話會がこれを推薦書とした。林房雄は『文學界』に集中の作品について詳しく書いた。

新京では九月、文話會例會として『原野』出版記念會をやつて貰つた。その記事が『滿洲文話會通信』十月號にあるから、記念のためにこゝに寫さして貰はう。

新京文話會では、九月例會として近刊せる委員大內隆雄氏の滿人小說飜譯集『原野』の出版記念祝賀會を開催することに決定、幹事今村榮治氏、文化協會主事杉村勇造氏等のお骨折りによつて、九月一十三日午後六時半より、國都飯店にて開催された。先づ今村幹事によつて開會、當夜、上梓された『原野』未着を遺憾とする旨報告あり、杉村勇造氏によつて、祝賀挨拶が始められた杉村氏は氏の十數年の滿洲生活に於ける業績を讃へ、最後に、滿人小說集が日本內地に於て廣く讀まれることを喜びとする意をのべれば、新京文話會に代つて岡田益吉氏が、氏の新京日日新聞に於ける學藝欄の功績をあげ、新興滿洲國の前途に文化事業の眞摯な發展を期することを希つた。ここで、當夜、出席された、原作者の三氏（古丁、小松、疑遲）を紹介し、次いで、北村謙次郎氏が、ユーモラスなスピーチで、氏の生活所を紹介し飜譯ぶりの文學的立派さを讃へた。滿人作家陳松齡氏は、大內氏の『原野』は、日滿文學の交流の爲めに意義あるものと推賞、『藝文誌』を代表して日語の挨拶を述べれば、『滿洲行政』の新井氏は、終揚たる言辭で、氏の滿洲雜誌界に於ける功績を顯彰し氏の飜譯は、又創作でもあると言及し氏は滿洲文化界に於ける彗星であると結んだ。その他天野光太郎氏、藤川研一氏、小林正壽氏、宮川靖氏等のユーモラスな祝辭についで宴酣はにして、原作者を代表して、古丁氏が丁寧な日本語を以て謝し、大內氏が今夕の出版記念會出席者に萬腔の謝意をのべ一同乾盃した。九時、金澤覺太郎氏の音頭にて、大內氏の萬歲、原作滿人作家の萬歲を三唱最後に、大內氏が、文話會委員として文話會に對する諸會員の後援を希ふ辭をもつて散會した、當夜の出席者は

大內隆雄、池邊青李、北尾陽三、美濃谷善三郎、磯部秀見、坂井艷司、劉玉瑋、天野光太郎、永野善七、神戸悌、小松、古丁、高木喜久藏、北村謙次郎、藤川研一、森斌、楳本捨三、杉村勇造新井練三、岡田益吉、下島甚三、太田正、宮川靖、長谷川潛、陳松齡、金澤覺太郎、古長敏明、藤澤忠雄、新井清五郎、中村秀男、江草茂、今井一郎、横會壽光、小林正壽、江島福一、和波薰杉山正三郎、安達世志子、森信、今村榮治

なほ、當日臨時應召中の奧一氏より、祝電があり、モダン滿洲社主幹小原克巳氏より清酒一斗、新京日日新聞社長城島舟禮氏より金一封の寄贈があつた。こゝにその御厚意を感謝する次第である。

更に十月の例會では『原野』批判座談會を開催し、その速記を新京日日に載せた。座談會出席者は山田清三郎、古丁、小松、長谷川濬、阪井艶司、逸見猶吉、今井一郎、阿南隆、今村榮治、大内隆雄であつた。

この頃出版されたものに工清定の小詩集『黄龍旗異聞』、天野光太郎の雜文集『毒にくさる』永原いね子の歌集『鏈盤』等がある。

なほこの頃の出來事として、古丁氏が盛京文藝賞を作品集『奮飛』によつて授賞されてゐる。

和木清三郎氏が來滿した、これが後に『三田文學』の滿洲文學特輯として結實した。

十一月、西田猪之輔氏が逝去した。『滿洲文話會通信』の記事を轉用して置こう。

『色々理事西田猪之輔氏は（病氣經過略）急逝した。享年五十二

西田猪之輔氏は曾て滿洲の歌壇が殆ど無形に等しい時代、その未踏路を開墾して今日の「滿洲短歌會」を創立、機關誌々合萌々を發刊して之れを育成今日あらしめたのは實に氏の精神的な努力と物質的援助に據るところであつたと言つていいだらう、更に昨年五月全滿に割據する歌人結社を結合して、滿洲歌友協會の創立が計畫された時、今夏物故した甲斐水棹女史と共に自ら陣頭に立つて其の實現に盡瘁したのも忘れることの出來ない氏の大きな歌壇的足跡の一つであらう。氏は又最近その主宰する歌誌々合萌々に自らのポケットマネーを割いて西田賞を設ける等、滿洲歌壇に遺された氏の功績は枚擧に遑なく、歌壇今日の隆昌の蔭には氏の存在が覆ふべからざる強力な支柱であつたと言つても敢て過言ではない。』

十四年末には近藤春雄が來、日滿文藝協議會を作るために劃策したが、精神的には一致しながら、形の上では實現するに至らなかつた。日本側の組織が未だ統一されてゐなかつたことも大きな原因であつた。言はゞ「出直して來い」といふやうな滿洲側の態度だつたのである。

なほ北川謙次郎、吉野治夫、大内隆雄、小松、今村榮治等がこの頃、文話會の派遣で滿洲各地に現地視察を行つてゐる。小生は、敎化、延吉、圖們、清津、羅津、雄基等を視て來た。

昭和十五年になると、先づ民生部に文化科が新設されたことが特記される。すなはち文化行政の總元締として厚生司内に新設、文化運動の指導助成その他を行ふことになつたのであつた。

こゝに康德六年の回顧を吉野治夫君並びに小生の一文で、まとめて置こう、（ともに『モダン滿洲』十二月號所載のものである）。

作品について

吉野　治夫

康德六年度の滿洲における文藝作品を回顧するとなると、先づ擧げなければならないのは何といつても滿日懸賞募集に當選して發表連載された二つの中篇小說「鋪子」北尾陽三作と「ザオドスカヤ街」蓮晶子作とであらう、

いつたい滿日中篇小說の懸賞募集は、果して、その準備が應募者側にありやと、未開發の文化資源目體が疑はれ、從つてその成果が大いに危ぶまれたのであつたが、結果は意外に相當水準の作品が多數集り、轡を並べて意を強うせしめたといはれてゐる。前二者はそのうち最も難點の少い二作として世に現れたが、その他に多數の夫々の特色に生きた捨て難いものがあつたであらうことを思へば、滿洲における文藝界の前途も洋々たるものである。

「鋪子」は新京の一小鋪の主婦が滿人ボーイと協力してアイスケーキにより商運を挽回するほゝ笑ましい筋を、日滿民族の極めて自然な心理交錯を描きながら着實に展開したもので、無難の意義もあり、危つ氣のない佳作であつた。北尾氏は以前に力作「ぬかるみの記」を發表して居り、その實力は充分知られてゐる人であつたが、此の作で一層廣く世の認めるところとなつたのは喜ばしいが、描寫が非常に新鮮で個性的で既成常套の筆に藉りることがなく、全く獨自の手法と表現を持つてゐた點で高く買へる。特に新人紹介といふ場合は此の他物を藉りぬ獨自の個性をこそ求められるのであつて、因襲的な人々にはそれが不慣れなため稚拙に見えることがあるかも知れないが、新鮮とは常に斯くして生れるものである。此の才氣換發の女流を滿洲に新たに見出したことは色彩を點じたといへよう。

由來、滿洲では男性よりも女流作家の方が着實な活躍をしてゐるが、本年度も牛島春子氏の「九目先生」の飄々たる味や、未完作「處女地」の本格的な身構へなど幾多の作品の群を拔いていたことを忘れられない。三宅豐子氏も驚くべく多くの作品を書いて、その筆力の堅實を示した。更に山口もと子氏の北滿における活躍が眼立ち、滿洲を去つた松原一枝、池淵鈴江、横田文子の諸氏も小品に作品に隨筆に點々各誌を彩つて、むしろ男性作家を量的に比較すれば後に瞠若たらしめてゐるの觀がある。また新人として青木郁子、藤堂惠美子、知識初枝氏等が出てゐるが何れもしつかりした

筆力の所有者で、青木郁子氏は『滿蒙評論』に數篇の好短篇を、藤堂惠美子氏は『滿洲婦人新聞』に中篇「愛痕」を連載、獨特な果實のやうな筆致を見せ、知識初枝氏は『協和』で着實な作力を最初から一部の人々に確認された。

新聞では前記の北尾陽三氏の作の他に同じく滿日に石森延男氏が連載小説「もんくうふおん」を發表、獨自な、むしろ革命的な香のするスタイルをもつて登場し爽眤區々であつたが注目を集めて此の作を置土產に東京へ去つた。

量的に多くを書いた人としては北村謙次郎、日向伸夫、高木恭造、上野凌嶺、宮井一郎、北尾陽三等を擧げよう。日向伸夫は滿洲取材に作品界に持に一進展を與へたと見られてよく「一時期」「第八號轉轍器」其他滿洲文學のため拍車的活躍が多かつた。宮井一郎は「樂土序章」を上野凌嶺は「大陸」を何れも『作文』に發表し始めたが兩者とも腰を据ゑた長篇らしく『作文』誌には珍しい通俗味があつてどう進行するものか興味がある。何れにもせよ腰を据ゑての長篇へと志す作家が二、三に留らなくなつたのは本年度の注目される現象であつたといふことが出來よう、大衆的な作品としては、工清定、多木羊二、奥一氏は依然として健筆、藤川研一、楳本捨三、母里山正夫、此小木壯介氏の作品も華やかに讀まれた。

今年度はまた新人を多く出してゐる。殊に本池稲一氏の活躍は著しいものであつたが、『作文』によつて下田淳造、園部定香、日下熙氏等、『滿蒙評論』及『新天地』で吉川一男氏が紹介されてゐる、

日下熙氏は忽然現れて、『作文』の同人となり後半期になつて矢繼早に相當量の作品を發表してゐるが、文章に特殊のニュアンスを持つた作家で、やゝ低徊的なところが力弱く同時にその點がたのもしけで、懐疑的で雰圍氣作家的なところがあり、特異な新鮮さで注目されてよい。

吉井一男氏は滿洲では新人と見られやうが豫て『九州文學』の同人で文學修業も一通り積んだ人らしい落着きを見せ、小品『はらから』の水際立つた藝術味、すつきりした輪廓は拔群のものであつたし、小說「背德」の心憎いまでの手慣れた筋運びや心理解說は垢拔けた熟練の程が見え、これは新人といふよりも今後の滿洲の文學のため技術的指導の立場に立つ人で、氏の親切な活躍が望ましく氏の渡滿を喜びたい。

批評家の新人として薊一郎氏が現れ、後半期において北滿の御垣衞士に桔抗する批評活動を南滿で受持つてゐた。丹念に、よく讀みその親切な理解的態度に敬意が表されるが。どこか閃くやうな鋭刄の足りないのが不滿である。

その他、福家富士夫、町原幸二、長谷川濬、青木實、富田壽、竹内正一氏等、例年のごとく作品を發表した外、竹内正一氏が小說集『氷花』を出版したのを昨年度のこととすれば、氏が『新潮』に小說を發表したことなど記憶されるほか、此の人々の實力としては特記すべき年ではなかつたやうに思ふ。

更に本年度における同人誌『斷層』の誕生と活躍は目醒ましく注目に價するものであつたが、入手の機會が少く讀んでゐない私は何も言へないのを遺憾とする。

結論として今年は創作活動が盛んな年であつたかといふと、さうとは思はれない。初頭において非常に盛大になることを豫想させたが、案外それほどではなく、傑作といふべきほどのものなく、活動は極めてばらばらに持續してゐたといふに過ぎないやうに思へるが、特に舊人の活動が奮はず、その代り新人がちらほら現れて新しい花園を開き始めた、或ひはその開園を暗示したといふやうな年であつたやうに思ふ。

日本文壇人の往來が繁く、從つて刺戟も小刻みに散分しながら絶えず搖き廻され、戰爭の影響も漸く精神的に顯屈したやうにたまつてきたといふ風で、文藝活動が來年はどうなるか大いに興味の存するところだが、『作文』『滿洲浪漫』等のごとき純文藝誌は小搖ぎもしさうにないし、諸文化雜誌も少しづつ向上線を辿り、或ひは合同氣運に向つて來てゐるところを見ると或ひは絢爛たる進軍期となるかも知れない。

期日に迫られ、短時日で調べもせず、記憶のみをたよりにしての回想なので或ひは大變な覺え落しや書き落しがあるかも知れないが、御海容を乞ふ。

二伸――大内隆雄氏の諸滿洲人作家の作品飜譯、宮下秀雄氏の「老殘遊記」飜譯（『滿蒙評論』）が諸誌の文藝欄を援け彩つて餘りあつたことは特記しなければならぬ。これは諸種の意味で大きな功績でもめり歡迎すべきことでもあり、感謝し且つ些か作家達は恥ぢねばならぬことでもある。

滿洲文學回顧

大内　隆雄

1

出來るだけひろく材料を揃へた上で、この小稿を書きたかつたのであるが、最近種々さし迫つた用事に追はれてゐたためその餘裕を得ず、そこに本誌の原稿締切日が迫つて來た狀態で、ほんの思ひつき式に、手許に何らの參考資料も置かず、たゞ今日一日で考へたことを順序もなく書いて行く、はじめに頭を下げておゆるしに預つて置きたい。

また、作品の檢討といふやうな方向は畏友吉野治夫君が書かれる由であるから、筆者は專ら概觀的な動向、傾向といつた點について書くことにしたいと思ふ。

2

第一に言へることは、今年の滿洲文學界は表面非常に活氣を呈して來たといふことであらう。これは日系、滿系、雙方についてさう言へるのである。

その若干の具體的な事實を言へば、滿洲文話會はその本部を大連から新京に移し色々の事業を以前に比べればずつと活潑に押し進めるやうになつた、作家・評論家たちは各同人雜誌の上では勿論、一般新聞、雜誌の上でも大いに積極的に活動するに至つた、滿系作品の日本への紹介も行はれた、日本の作家も多數來滿し日滿間に文學の部門に於いて相當に緊密な連絡が取られるやうになつた、滿系作家は『藝文志』をはじめとして種々の目主的な發表機關を持ち先づ何よりも書く、書いて發表するといふ努力に傾注するやうになつた、また滿洲國政府の民生部がこの國の文學のために關心を持ちその育成のために方策を講じようといふ段階に到達した、協和會では文學運動の重要性を認識しその助成の要あることを思ひ工作を始めるに至つた等々……何れも喜ばしい現象が見られたのであつた。

だがこゝに考へねばならぬことは、これらは何れも表面的には甚だ活潑さを示した現象であり、本質的にも喜ばしい出來事であつたのであるが、その內容はどうか、その內實の成績はどうかと言へば、われらはまだ單純に樂觀すべきほどのものではなかつたといふことなのである。

文話會の活動にしてもまだその端緒が作られただけのことである。その組織にも、事業にも、なほ檢討を要し、新しい計畫を要するのだ。時流に乘つたジャーナリズムへの進出の如き、嚴に批判の必要があらう。日本文壇との接近にしても、まだ滿洲文學を一種の植民地文學扱ひするやうな、また端的な文化侵略論を說くやうな論調が日本には存してゐたことを思へば、簡單にこれを喜んでは居れないのである。滿系文學が盛んに出るやうになつたことはいゝ、しかしその作品自體の價値はどんなものであつたか、だれだけの到達點を示してゐたか、仔細に見れば、未だしの感を覺えさせられるのも多かつたではないか。

更に、滿洲國政府の積極的な文化政策への乘り出しといふことも愼重に考へねばならぬ問題である筈なのである。

3

前にも書いたやうに、筆者はこゝでは、動向といふものを問題にする。單なる作品や會合、出來

事等についての記錄のやうなものは宜しくこれを年鑑式のものに求めたらよいと思ふからである。

そこで、滿洲國の文化政策への乘り出しといふことについて少し書いて置きたい。

尤も、このことについてはまだ何ら正式に、具體的に發表されてゐるわけではない。ただ觀測記事として報道されたり一部の人が多分に自己の希望を混へて抽象的に語つたりしてゐるだけのことである。しかしともかくも、來年度から、どれだけかの程度に於いて民生部などがこの方面に乘り出して來るであらうことは間違ひないと見てよいであらう。

この問題については、筆者は他の機會にも書いたことがあるのであるが、重複する點をゆるして貰つて、こゝにも書いて置きたいと思ふ。

先づ一般的に言つて、建國以來すでに七星霜を經てゐることを思へば、今日このやうな動向が見られるに至つたことも別に不思議でなく、また早や過ぎるとも言へないであらう。それに國家權力による統一的な文化政策の實施といふことは一種の近來の流行とも言へるのであつて、特に獨逸のナチス政府が行つたそれは顯著な先例となつてゐるであらうし、つねに新しくあらうとする滿洲國官吏がこゝに考へを致したのもさもあるべきことともおもはれるのである。且つまたこの國は知らるゝやうに複合民族國家であり、しかもその大多數の民族は文化的に甚だ遲れた狀態にあるのである。良き文化政策の效用は明白である。

それ故、いま言へることは、第一にはその方法に於いて周到な用意が無くてはならぬことである。遲れてゐる民族を引き上げ追ひつかせるための考慮がなされねばならぬ。先進民族が持つてゐる高度の文化をそのまゝに押しつけることは出來ぬ。この方針はあくまでも貫徹されねばならぬ。

第二に、問題としたいのは、果して當局にさうした文化政策を效果的に實施するのに必要な人的スタフが整つてゐるかどうかといふことである。意圖だけでは、それがいかに良くても、何んにもならぬのだ。協和會についてもまた然りだ。最近の若干の經驗よりして、この點についてわれらは多大な憂慮を感ぜざるを得ぬのである。繰り返して言ふ、計畫と豫算だけあつてもどうにもなるものではない、人を！　先づ人を！　である。

4

筆者に與へられた紙幅にも限りがあるので少し急がねばならなくなつた。

今年の滿洲文學を回顧して言ひたいこと、作家、評論家への注文として言ひたいことを簡潔に言葉に壓縮して言ふと、もつと勉強すべきだ！　さういふことになるのである。

これは色々な點について言へることであつて、題材に於いても然り、技巧に於いても然りであ

る。だが、それ以上に筆者は各人の思想について、その社會觀、世界觀についてこの注文を聲高く發したいと思ふのだ。みはるかす限り何とそこには思想なき文學、思想なき文藝評論が多かつたことか！　滿洲文學の貧困はまさにその思想性に於いて極まつてゐるのではないか！　もとよりこれは筆者自身をも含めてその評語である。わが友よ、一緒に力をあはせて前進しようではないか！　東亞協同體といふことは空語ではない筈だ。

文學人もまたその己れの分野に於いてなすべきところに努めねばならぬのだ。

次にもう一つの、同顧より發する注文は文學をもつと社會的に進出させるべきだといふことだ。文學と連繫するところの多いラヂオに、演劇に、映畫に、今年の滿洲文學はどれだけを與寄し得たか、顧みて寂しいのである。そしてこの努力が足りないが故に、非藝術的なものを、また滿洲文化創建の方向と背馳したものをさうした分野にのさばらせるいとふことにもなつてゐるのではないか。象牙の塔から、乃至は溫度八十度的溫室から、われわれは荒々しい風も吹いてゐる原野に打ち出でねばならぬ！

草卒なる走り書きをこゝに終る。意熱しての妄言は海容を乞願する。

第十七章　『滿洲浪曼』そのほか

ここで『滿洲浪曼』について語ろう。

『滿洲浪曼』第一輯は昭和十三年秋に出た。次のやうな內容であつた。

小　說　　吉野　治夫
姉妹のこと　　長谷川　濬
傳　說　　下島　甚三
一つの記錄　　福家富士夫
浙江旅社　　今村　榮治
同行者

鶴　北村謙次郎
白日の書　横田文子
アリョーシャ　田兵
詩　大内隆雄譯
霧宿　矢原禮三郎
なめくぢの歌　坂井艷司
長城論　長谷川四郎
隨塵　町原幸一
雑草　坪井與
六月の雪　木崎龍
一評論　牛島春子
窓をひらけ
農村を描け

映畫演技論　アイリスベリー
滿洲演劇の建設　松本光庸譯
特輯　藤川研一
滿洲文化について　諸家

『滿洲浪漫』の中心になつたのは與村謙次郎である。第一輯に書いてゐるので同人と言へるのは北村謙次郎、長谷川濬、木崎龍、坪井與といふところであらう。第三輯を見ると、飯田秀世、今井一郎、松本光庸、長谷川濬、北村謙次郎、木崎龍、綠川貢、逸見猶吉、横田文子、矢原禮三郎、荒牧芳郎、岡田壽之、坪井與、大内隆雄が同人として名をつらねてゐるが、この同人の中で、北村への協働といふ點ではかなり濃淡の差があつたやうである。『滿洲浪漫』ははじめ滿洲文藝堂が發行所になつてゐた。清新な裝ひではあり、相當な作品を相當厚味のある各輯に盛つたので、かなり重厚味を持つてゐるといふ感じで一般に受け容れられたやうに思ふ。掲載作品を同人のものに限定せず、各方面から寄稿を求め民生部募集の、文藝入選作を載せたりしたことにも新味があつた。

第二輯の内容は次の如くであつた。

小説

白氏堂徑徂　竹内正一
家鴨に乘つた王　長谷川潔
浮雲　青木藥吉
在人日記　長谷川四郎
隣り三人　袁軍
滿洲の胎動（承認記念文藝當選作）　大内隆雄譯
魚骨寺の秋（同右）　工清定

詩

天壇にて　用章
地平の門　大内藝雄譯
藤原定
坂井艶司

行山隨筆　逸見猶吉

映畫的とは　吉野治夫
映畫雜記　多木羊二
新京斷片　荒牧芳郎
佳木斯紀行日記（繪と文）　今井一郎

評論

文學の表情　木崎龍
滿洲文化映畫について　森信
同人語　編輯同人

第三輯は次の通り

小説

大同大街　長谷川濬
マーシュカ　H・A・バイコフ
畫　夜　大谷定九郎譯
石田君の幼な友達　古丁
お談義部落　岡田壽之
或る環境　北尾陽三
日記帖の飜譯（建國記念文藝當選作）　北村謙次郎
春の復活（同右）　比士川久雄
詩　李夢周
地理二篇　大内隆雄譯
天使變形　逸見猶吉
黄昏の訪問　坂井艶司
唄　矢原禮三郎
ショパンに　長谷川四郎
　藤原定

隨筆
叔父とランプの絵　町原幸二
言葉の衣裳　中村能行
國語と映畫　坪井興
牛（絵と文）　池邊青李
俳句
春より夏―　金尾梅の門
武藏野の初夏　伊東月草
評論
竹内正一論　西村眞一郎
映畫の作家精神　松本光庸
島村抱月論　木崎龍
特輯　文化關係當事者に訊く
金丸精哉、根岩寛一、青木實、吉野治夫、磯部秀見、山崎未治郎、大塚淳、藤山一雄、奥村義

信、金澤覺太郎

次は特輯で『滿洲作家選集』と題し、次のやうな内容であつた

秋	吉野一治夫
烏爾順河	長谷川濬
犁花落つ	疑遲 大内隆雄譯
虚脱	北尾陽三
或る環境	北村謙次郎
地の種子	大瀧重直
緑の歌	晶埜ふみ
窓	石軍 大内隆雄譯
炷一支	木崎龍
北邊	青木實

（これに北村謙次郎の「時評」、大内隆雄、長谷川濬、木崎龍、北村謙次郎の「四季語」と題した同人雑記を加へた。）

以上の作家、詩人等のうち、吉野治夫、竹内正一、坂井艶司、町原幸二等は『作文』同人であつた。下島連三、今村榮治等は新京文藝集團の同人、晶埜ふみ（もと、庄野ふみと署名した）は新京日日等に出し、のち『文學地帶』に加はつたりしてゐる。彼女、近時、新聞などにもきめのこまかい隨想類をよく書いてゐるが、會合等には顔を出すのが嫌ひらしく、彼女の實物を知つてゐる人は少いであらう。

横田文子の「白日の書」は曾つて日本で發表し、芥川賞の候補として取沙汰されたこともあるといふ作品。彼女は飄然と新京にやつて來、寛城子に住み、「滿洲行政」あたりに短篇を書いたりしてゐたその後、いつの間にか坂井艶司夫人となり、いいお母ちやんになつてしまつてゐた。矢原禮三郎は日本の『麵包』等に出してゐた旅順育ちの詩人、滿映に入り、その後北支、中支へ行き最近また滿洲に歸つて、「日本人には寒い所が身體が緊張していいですよ」と言つてゐる。長谷川四郎は濬の弟、アルセーニエフの『デルスー・ウザーラ』を譯してゐる。坪井與は新聞人から映畫人になつた男。松本光庸も久しく滿日の映畫批評で鳴らし、ついに映畫人となり、今は華北電影にゐる。青木藜吉は大同報にゐた鮮系の青年と聞く、才能を有してゐる人と思はれたが、その後どうしたかを知らない。工

清定は撫順高女の先生、最近は『月刊滿洲』に入り、『迎春花』を出してゐる。

バイコフが紹介されたのは『滿洲浪曼』第三輯あたりがはじめではなかつたか。中村能行は若い滿映の脚本家だつたが後に病んで日本で死んだ。大瀧重直は日本の東北にゐる農民作家、滿洲に來、暫らく開拓地にゐた。

『滿洲浪曼』は康德七年五月には特輯『滿洲文學研究』を出した。それには次の諸篇が收められてゐる。

第一部

建國文學私論　長谷川潔
滿洲詩論　三好弘光
滿洲文學の基本概念　西村眞一郎
滿洲文學の特質　大內隆雄
探求と觀賞　北村謙次郎

滿洲文學の方向　吉野治夫

第二部

批評に就て　村岡勇
滿日文學交流雜談　王則
臨床的滿洲文學論　蔚一郎
滿洲文學私觀　日向伸夫
自然描寫に戒める　丘益太郎

第三部

古丁に就て　辛嘉
寒馳とその作品　小松
滿人作家論・序說　木崎龍

第四部

『作文』四十輯まで　宮井一郎
滿洲ジヤアナリズムの一面　新井練三

第五部

御用詩家に就ての斷片　池邊青李

滿洲音樂序說　陳其芬

この特輯はいろいろな意味に於いて、非常に意義ある企てであつたと思ふ。いろいろな角度から文學を中心とする滿洲藝文の探求がここで行はれ、一應の結實を示してゐるのである。

この後、『滿洲浪曼』第六輯は興亞文化出版社（大學書房）に移り、四六判となつて康德七年十一月に出てゐる。內容は——

惡　魚　筒井俊一

月地抄（詩）　檀一雄

春　鵠　北尾陽三

回歸線　夷地作　森谷祐三譯

蜜柑に寄せる（詩）　高森文夫

松花の流れは輝いてゐる（戲曲・三幕五場）　大內隆雄

更に翌年春には春季作品集『僻土殘歌』を出した。內容は——

僻土殘歌（詩）　檀一雄

鐵路機廠　鈴木啓佐吉

鷲　長谷川滑

樹々に匂ふ魚　檀一雄

皮　鞋　大內隆雄譯　菩提作

私の平凡な生活の記錄　北尾陽三

附錄　白系露人作家紹介　大谷勇夫

跋、長谷川滑、大谷勇夫、鈴木啓佐吉、北尾陽三、檀一雄

そして、康德九年には『滿洲浪曼叢書』として北尾陽三の『明暗』、大內隆雄の『或る時代』、鈴

木啓佐吉の『愛情の緩急』、島羽亮吉の『流沙香綺譚』を出版した。

年四季刊といふはじめの案は必ずしも實行されなかつたが、『滿洲浪曼』は以上のやうに續いて來た。ひとへに北村謙次郎の頑張りに依ると言はなくてはなるまい。

康德六年、新京で出た『滿洲文學』には遠藤美津男（菫川千童）、熊城次、綠川貫、志賀修、ささき・つや、堀善照、佐和山一郎、吉田直志、西谷正夫、白石傳、砂山楠雄等が書いてゐる。遠藤、熊、佐和山、吉野、志賀、砂山、西谷のほかに吉留幹雄、永井光春、重村貞雄、川口了が同人だつた。このうち、菫川千童、西谷正夫は新京日日にも頻繁に投書した連中で、私には懐しい人たちだ。どちらも後に日本へ歸つたと思ふ。

『文學地帶』の同人は、今村榮治、大脇一雄、太田正、高木喜久藏、酒井悅子、宍戸貫一郎、篠原捷三、庫野ふみ、廣中一雄、桃北好登だつた。

桃北も新京日日の文藝募集で登場して來た男で、高等商業を出てゐるといふのにそれらしくない、鹿兒島生れの純情歌人、のちには新京日日に入つて來た、その後。哈爾濱日日に轉じ、今は牡丹江に愛妻とおとなしく暮してゐるやうである。

忘れ難いのは高木喜久藏、彼また新京日日で登場、新京文藝集團の能動的な詩人として活躍した。はじめ明治製菓新京營業所に勤務、前年滿拓に入り、四月出張中、北滿で匪襲に遭ひ二十五歳の生命を殉職したのであつた。新短歌から出發、詩作に熱心だつたが、殊に重厚な風格、友情に厚く、みな痛惜したことであつた。

これより先、大連では長老井田（西卷）潑一が逝いてゐる。醫師としてより、演藝研究家として知られ、放送界への盡力も大であつた。

『滿洲文學』に詩を書いてゐる『ささき・つや』といふのは、新京日日にも短歌が入選したことのある某婉地にゐた年增の女性だらうと思ふのだが、或ひは誰かの假託なのかもしれない。

なほ康德七年春、大連で「大陸ペンクラブ」といふのが出來、『大陸文藝』を刊行してゐる。西村良雄、松谷愛里、井久保健次、岡本勉等が書いてゐた。

撫順の『斷層』はいつ頃から出たのであらうか、康德七年にはすでに七、八輯を出したやうである。最近出たのが二十一輯であるから、この撫順文學研究會も續いて來たものである。

滿鐵哈爾濱圖書館の『北窗』は昭和十四年に創刊されてゐる。文學關係では渡邊仲吉、三宅豐子、木崎龍、赤川幸一、山口もと子、大瀧重直、加納三郎、紫藤貞一郎、藤原定、唐木順三、島木健作、富田壽、石森延男、吉野治夫、合志光、井田潑三、村岡勇等が書いて來てゐる。

なほ同誌二卷一號に石森延男氏が書いてゐる一文は資料たる部分があるので抜き書きして置こう。

私が渡滿したのは大正十五年の春であつたが、その時、滿洲に住む子どものために、讀物が全くなかつたのが、何よりもなさけない氣がした。成人たちは、それぞれの娯樂もあり、讀書しようと思へばいくらでも圖書はあるが、子どもには、極めて冷淡な仕打ちをしてゐた。兒童文化などといふ運動が、やつと今日本に起りかけてゐるのでもわかるやうにその頃、滿洲には、子どもを想ふ人は僅かであつた。幸ひ私は、教科書編輯部に勤めてゐたので、子どもの文をかゝねばならなかつたのを機會にして、兒童文學に身を入れ、いくつかの讀物を、自費出版する決心をした。

『ますの』（これは、小學生のために、上年用と下學年用の二種、月刊）をだし。中等學生のために『帆』を、年三回に刊行した。道のないところに道を拓くことのむづかしさは並大抵ではなかつた。たとへ細くとも一本の道ができれば、その道を傳つて歩いてくる人があるものだ、そして、『童心行』といふ同人雜誌になり、『童話作品』となり、『日本の少女』となり『裝』となつた。しかし同人の住所がちりぢりになり、めいめいがよき實を結んだので、『裝』をこの十一月をもつて解散してしまつたのである。この間十三年、もし、滿洲にも兒童文化史といふのが編まれる時がくれば、この流れはひらひあげられていいものもと思ふ。

――確かに、『帆』などは私も見たことがあつた。それと、『月刊滿洲』がやはり一時、稚い者のための附錄をつけたことがあつた。これには寺田喜治郎氏などの助力があつたのだと思ふ。

この頃の來滿文人には、村山知義、岸田國士その他がある。岸田氏は滿洲からの旅の歸りに翼賛會の文化部長就任交渉を受けたのだつた。

康德七年六月、滿洲文話會でこしらへ關東軍に獻納した『滿洲よもやま』について少し書いて置こう。それは前年の總會でその刊行を決議したもので、一年近くかかつてやつと出來上つたわけであつ

た。菊判二七〇頁に地圖、グラフを添へた内容豐富な一冊本、執筆者の顔觸れは在滿文筆人を總動員した賑かなものであつた。すなはち――

表紙　池邊　青李
口繪（風俗・風景）　三枝朝四郎
滿映演員寫眞　滿映宣傳課
扉　白崎　海紀
卷頭言「滿洲よもやま」に寄す　長谷川少佐
小說　牝鷄　牛島　春子
童話　兵隊先生　山田　健二
滿洲の歷史の話　奥村　義信
滿洲の地理と住民　山崎末治郎
隨筆　高橋　源一
滿洲好き
新京と無作法　新井　練三
滿人の日語勉強　橋本八五郎
戰線とラヂオ　金澤覺太郎
車窓にて　井上　講二
樂屋裏とぼれ話　絲山　貞家
戀愛統制委員會　丸山　海介
コント
王さん　青木　實
水洩り事件　長谷川　潛
半田半平のこと　木崎　龍
ホントにサヨナラ　町原　幸二
務　雨　今村　榮治
延長戰　富田　壽
皇帝カツレツ　下島　甚三

銃後に協和會あり　十郷　誠
産業五ケ年計畫と特殊會社　三谷　善衛
詩
沙漠の中　小杉　茂樹
春の國境　城　小碓
白熊淵歩　島崎　曙海
宗瓦賦　坂井　艶司
默禱　小池　亮夫
繪と文　國都　池邊　青季
〃　年齢　武田　一路
關東州の話　西村　眞一郎
滿洲田舍のことども　上野　凌磐
短歌
七月の北滿　藤山　一雄

心境をうたふ　永原いね子
兵發つ　富田　充
初日影　島田のはぎ
北滿の春　富永　幸子
をみな我　津田八重子
銃後一束　甲斐　雍人
なはとび　寺本　初青
新短歌
日記より　白井　尚子
硝子の歌　藤井千鶴子
滿鐵縱斷　朝倉　嗣郎
開拓村の概要と逸話　末次　嘉平
滿人の娯樂　與村　義信
滿人の風俗　大内　隆雄

猫　二題　三〇六　三好弘光
コント　酒井美津子
スイートピーのやうな女　北村謙次郎
チエの一人ぐらし　近東綺十郎
季節　日向伸夫
バスを待つ間　北尾陽三
祖父　秋原勝二
秋のコント　吉野治夫
滿洲の傳說　編輯部
漫才　滿洲見てある記　奥の家一ちゃん　嘉の家惠ちゃん　古長敏明畫
隨筆　藤山一雄
空蟬　八木橋雄次郎
兒童點々　田村光子
奉撫街道　息子　大野斯文
武運長久　天野光太郎
人情ととうがらし　今西忠一
實話小說　ひとはたぐみ　藤川研一
ユーモア小說　鶴と兵隊　山下義行
俳句　早春の聰下にて　金子麒麟草
川柳　軍國譜　森脇襄治
花柳哲學　大島濤明
女性よもやま　鷲崎哲二
滿洲の娘たち　加納三郎
滿洲女學生氣質　柳生昌勝
密蜂の如く　山口もと子

コボちやん　三宅　豐子
哈爾濱・奉天間　原　三千代
今は昔北京籠城手記　磯部　秀見
滿洲十勝（川柳隨筆）　大島　壽明
浪花節　日の丸供養　滿鐵社員會選
琵琶歌　柳田驛長　滿鐵社員會選
漫　畫
梅林秀麟、杉田八郎、李平和、エボス、坂本牙城、藤井日出刀、王仲子、佐々木じゆん、杉田八郎、久保山天津生、藤井日出男
江戸小咄　古川柳
小說　滿洲の受胎　工　清定

右のやうな內容である。文話會では一般からの購讀希望が多く、軍の諒解を得て、一般向けの分を作つて賣つた。一圓といふ安い値段だつた。

『滿洲よもやま』の序文は仲賢禮、大內隆雄の名で書かれ（仲が書いたものと思ふ、或ひは吉野か？）、編輯人が仲、發行人が山口愼一となつてゐる。實務に多く當つたのは今村榮治で、今さら乍ら、感謝に値ひする。

原稿では磯部、丸山、鷲崎の三位一體氏が大いに活躍してゐることがわかる。そのほかに、古川柳、古小咄も彼の選したものであつた。ところが、これらは好色乃至反道德の故を以て大分御難を蒙つた。私個人の感想を言ふと、田村光子の「奉撫街道」など、ちよつと史的な（？）意味を持つてゐるものなのである。彼女、その少し後、川口姓となり、私をしてその事あつて奉撫街道晴れてゐるの一句をものさした……。

奧一の漫才も凝つたものであつた。知らず、合方の名は、當時の……彼女を藉れるものに非ざるか？

書き洩したことを少し追補して置く。

康德七年、民生部大臣文藝賞は古丁「平沙」に與へられた。

康德七年の文話會總會は六月三十日、民生部講堂で開催、代表代議委員會に杉村勇造、金澤覺太郎山崎末治郎、木崎龍、大內隆雄、吉野治夫、今井一郎、北村謙次郎、小松、坂井艶司、今村榮治（以上新京）、橋本八五郎、城小碓、西村眞一郎、古川哲次郎、島崎曙海、絲山貞家（以上大連）、富田壽、今西忠一、青木實、小杉茂樹、飯河知記（以上奉天）、竹內正一（哈爾濱）、上野凌嶝（齊々哈爾）が出席、傍聽者に民生部深井文化科長、同科清水鎌一兩氏があつた。本總會出席者は、金澤覺太郎、高原富士郎、美濃谷善三郎、佐藤甫、高橋房男、橋本淺夫、劉國藩、劉爵青、吉野治夫、大內隆雄、杉村勇造、木崎龍、辛實、外文、小松、坂井艶司、津村雅雄、小川久次郎、森斌、楳本捨三、藤川研一、鮎川三彌、境野一之、伊藤正次、阿蘇高行、八木一平、北尾陽三、森信、信清悠久、江幡寛天、島田和夫、竹部勝之進、小島保太郎、山崎末治郎、今井一郎、陳松齡、新井練三、臺庠周、山田清三郎、北村謙次郎、磯部秀見、李迺賡、今村榮治、寄本司麟、絲川貢、下島甚三、筒井俊一、町原幸一、安達義信、田兵、山內利之、青木實、日向伸夫、中山美之、飯河知記、小杉茂樹、今西忠一、富田壽、宮井一郎、橋本八五郎、西村眞一郎、古川哲次郎、島崎曙海、絲山貞家、城小碓、竹內正一、大野澤絲郎、上野凌嶝、岡堅清平、沐蕭、秋原勝二、伊藤豐、高木恭造で、傍聽者に關東軍報道班長長谷川少佐、同鈴木嘱託、民生部深井文化科長、同清水鎌一、村山知義、國通吉良記者等があつた。

この頃、故甲斐水草の歌集『埴道以後』が出、島崎曙海は『宣撫班戰記』を出してゐる。田田清三郎、絲川貢、筒井俊一らが新京住人になつてゐることも右の總會で知られる。古川哲二郎は滿日出版部へ入つた。

八月には朝鮮の作家李泰俊氏が來、新京では座談會を開いた。

更に、『滿洲年刊歌集』第一輯が、紀元二千六百年奉祝の意味で滿洲歌友協會から刊行された。一百六十餘人の短歌作品を集めものであつた。

赤城沙英氏の遺句集『鬱』は大連文話會から刊行された。

『作文』同人の作品を淺見淵が編纂した『廟會』が發行された。

九月發表された滿洲文話會の役員一覽を寫して置こう。當時の文化的人材の配置が知り得られる。

本部

會長　榮厚

理事會（理事）

文藝部長　岡田益吉

美術部長　淺枝青甸

演劇部長　馬冠標

音樂部長　大塚淳

映畫部長　根岸寛一

大連支部長　紫藤貞一郎

奉天支部長　衞藤利夫

新京支部長　杉村勇造

哈爾濱支部長　半田敏治

齊々哈爾支部長　近藤喜助

北京支部長　石原嚴徹

東京支部長　未定

事務局

事務局長　吉野治夫

文藝部委員　大內隆雄

山田清三郎

徐古丁

陳辛嘉

吉野治夫

美術部委員　杉村勇造

池邊青李

甲斐巳八郎

佐藤功

演劇部委員　板垣守正

藤川研一

磯部　秀見

音樂部委員

陳　小虬
北小路功光
美濃谷善三郎
小貫譽四郎
中山　義夫
木崎　龍
高原富士郎

映畫部委員

趙　小松
今井　一郎
古川哲次郎
青木　實
高崎　草朗
上野　凌嶺

新京支部幹事長
大連支部幹事長
奉天支部幹事長
哈爾濟支部幹事長
齊々哈爾支部幹事長

北京支部幹事長　近東綺十郎

支部

新京支部

支部長　杉村　勇造
幹事長　今井　一郎
文藝幹事　長谷川　潛
美術幹事　劉　爵青
演劇幹事　今井　一郎
音樂幹事　白崎　海紀
映畫幹事　森　武
楳本　捨三
八木　一平
酒井　義雄
森　信

奉天支部

支部長　坪井　與

幹事長　衞藤　利夫

文藝幹事　青木　實

富田　壽

美術幹事　小形　茂樹

日向　伸夫

宮井　一郎

青木　實

演劇幹事　横山　繁行

野田　武太郎

前田　昇

飯河　知記

中山　美之

音樂幹事　今西　忠二

酒井　美津子

映畫幹事　高尾　憲太郎

澁谷　哲夫

橋本　壯介

大連支部

支部長　紫藤　貞一郎

幹事長　古川　哲次郎

文藝幹事　城　小雄

井上　麟二

平井　孝雄

大野　斯文

橋本八五郎

武田　勝利

美術幹事　島崎曙海
　　平山斌
　　川崎陸奥男
　　河野想
　　三井辻登
　　楢原健三
演劇幹事　青山春路
　　絲山貞家
　　池田孝
音樂幹事　古藤孝子
　　池永由雄
映畫幹事　西村眞一郎
　　古川哲次郎

哈爾濱支部

支部長　牛田敏治
幹事長　高崎草朗
文藝幹事　加藤齡明
美術幹事　山口もと子
映畫幹事　高崎草朗
　　東紀江
演劇幹事　多田修
（舞踊）　小野崎仁
音樂幹事　山路一郎

齊々哈爾支部

支部長　近藤喜助
幹事長　上野凌嶺
文藝幹事　鬼木魁
　　古尾重芳

美術幹事　宮脇謙太郎
　　上野　凌嶮
　　藤居　二郎
演劇幹事　兵頭　青史
　　河合　利貞
　　田中藤四郎
音樂幹事　馬[redacted]
映畫幹事　稻岡憲之助
　　野本千代壽
　　西本　終吉
　　瓜生　吟
北京支部　右原　巖徹
支部長　近東綺十郎
幹事長

東京支部　未定
諮問機關
會長顧問
關東軍報道班長　長谷川宇一
大連市長　別宮　秀夫
協和會中央本部輔導部長　恒吉　秀雄
齊々哈爾市副市長　橿尾　信次
民生部教育司長　田村　敏雄
奉天市副市長　多田　晃
滿鐵理事　中西　敬憲
總務廳弘報處長　武藤　富男
齊々哈爾鐵道局長　大橋　正己
奉天省次長　松田　令輔
濱江省次長　松田　芳助

民生部文化科長　深井俊彦
滿洲映畫協會理事長　甘粕正彦
關東州廳長官　三浦直彦
滿洲演藝協會副社長　三浦義信
大連商工會議所會頭　首藤定
最高檢察廳次長　平田勳
滿鐵新京支社長　平島敏夫
滿洲弘報協會理事長　森田久
新京特別市副市長　關屋悌藏
理事會參與
滿洲弘報協會業務課長　田中總一郎
滿洲日日新聞社長　松本豐三
滿洲行政學會常務取締役　新井練三
民生部編審官　寺田喜治郎

滿洲電業理事　山崎元幹
新京日日新聞社長　城島舟驢
新京特別市公署教育科　和泉德一
滿洲新聞社長　和田日出吉
滿洲國通信社編輯局次長　瀨沼三郎
マンチュリア・デーリーニュース社長　小野敏夫
滿洲圖書配給會社取締役　駒越五貞
滿洲事情案內所長　奥村義信
滿洲拓植公社總務部長　村山藤四郎
新京音樂院副院長　坂西輝信
立法院秘書長　劉恩格
民生部厚生司長　王秉鑠
新京滿鐵、電業ブラスバンド樂長　加藤哲之助
協和會中央本部資蹟部長　朝秉善

協和會奉天省本部事務長　山口重次
滿洲醫科大學教授　黑田源次
滿洲醫科大學教授　鈴木直吉
協和會大連事務所長　小山貞知
大連市會議員　恩田明
鐵道總局弘報課長　芝田研三
大連　木原鐵之助
大連　田村詢一
大連　平島信
齊々哈爾新聞社長　片山誠三
齊々哈爾放送局長　向利夫
協和會龍江省本部事務長　平山節
哈爾濱中央放送局長　三井實雄
大連音樂學校長　園山民平
大連音樂教授所　村岡樂童
滿鐵囑託　高津敏
哈爾濱日日新聞社長　寒河江啓吾
東滿日日新聞社長　須佐美芳男

これを見ると、些か感慨も覺えさせられる。その後の身分の變動。離滿した人々もある。すでに故人となつた人もある。

召水瀨治三郎氏など、まことに惜しい人物だつた。遺稿句集は後に友人によつて刊行されてゐる。

――私とは、氏が北支を引きあげ大連に立ち寄つた頃から緣があつた。氏は「儒林外史」の飜譯を、石本憲治氏に預け、私はそれを原文と照合したものだつた。後に滿日に連載されたあの飜譯である。また新京に來てからは、よくその氣焰を聞かされた。われわれはそれを「おでん屋談義」などと名付けて、尊敬したものだつた。談論風發、あの禿げた頭から湯氣を立てて、熱辯主張した。のち、胸を病み、一時は孟家屯に療養、その強い意志で一と頃盛り返してやうだつたが。つひに逝いた。岡田益

吉氏が日本へ引き上げる際には、新京初期の新聞人だけでの送別會をやつたが、その時には老も出席したものだつたが……。

村岡榮重、須佐美芳男等もすでに亡い。（なほ前記の、會長顧問の中には、交渉中の人もあつた。）

康德七年秋には、民生部の援助により日本及び國内奥地への會員派遣を行つた。

その顔觸れは次の通りであつた。

日本派遣

池邊青季、張榮鐵、行事、富田壽、日向伸夫、石揮、今村榮治、坂井艶司、于蓮蓉、大内隆雄

國内奥地派遣

川崎陸奥男、竹内正一、楳本捨三、王秋螢、北田一男、平山斌、佟子松、町原幸二、趙剛、北尾陽三、小杉茂樹、古屋重芳、青木實、赤羽末吉、上原三郎、今井一郎、綿山貞家

この企てはかなりの收穫があつたと考へられる。坂井艶司、今村榮治などはこの時、初めて日本内地の土を踏んだのであつた。私も七年振りに東京へ行き、紀元二千六百年のお祝ひの日を過し、郷里

柳河へ寄り柳河へ寄つて歸つて來た、私の報告は「最近に於ける日本文化界の動向」として提出した。日本文化界が漸く新體制組織へ進み入らうとしてゐる時であつた。東京では石原、坂井、今村、大内のために上村哲彌、岡二郎、近衛十郎、日下興、野村正良、池淵鈴江らが歡迎會を開いてくれた。また文藝家協會及び日本文藝中央會書記長今日出海、日本文學會諸會員（河上徹太郎、横光利一、上田廣、岡田三郎、小林秀雄、中島健藏等）、『文藝』の小川五郎、『大陸』の富重義八、『改造』の小野田政などに會つた。

さきに齊々哈爾の文話會支部發會式があり、それに私は派遣されて行き、齊々哈爾の劇場で講演をやつた。（これは宮井一郎が『滿洲行政』に「齊々哈爾文話會發會式」と題して小説に書いてゐる。）その後、牡丹江支部が出來、吉林の支部も發會式をやつた。吉林では折柄來滿中の石井柏亭氏が講演、私も前座を勤めた。滿系の女學校が會場だつたが、良い聽衆だつた。吉林では新井清五郎、秋原勝二兩君が大いに奔走された。

この年の終りには文話會組織と協和會との聯結についての協議が進められた。が、それはつまり

した具體的な形をとるまでには行かなかつた。

衛藤利夫『短笛』、川島豐敏『北保壘』（詩集）等が出版され、滿日出版部企畫の『大陸の相貌』の編輯が進められてゐる。『大陸の相貌』は滿洲及び北支在住の文筆人を總動員して、滿洲、北支の實相を傳へようと企畫された一書であつた。

長谷川濱はさきに滿日にバイコフの「偉大なる王」を「虎」と題して譯載したが、これが文藝春秋社並びに滿日から出版され、世評を呼んだ。

康德八年。

二月には、安東支部發會式が擧げられてゐる。

が、漸く、新しい情勢の展開が迫つて來た。三月十五日發行の『文話會通信』には、次のやうな標語が掲げられてゐる。

◇如何なる組織の變遷あるとも、文話會精神だけは堅持しよう
◇各地の文化會を永久に榮えさせよう
◇文話會はあらゆる文化問題の精神的母胎である

なほ上野白人氏がこの年死んだことを書いて置く。『滿洲』に寄せた「長春思ひ出記」が遺稿となつた。前年あたり、鎌倉から滿洲へやつて來、元氣に見えたのだつたが。

この年の夏、新京日日新聞の學藝欄に「新京文藝人イロハ歌留多」なるものが掲載された。それには次のやうな前書きが附けてあつた。

「新京文藝陣の惡太郎ども、先夜某所でビールを飲みながら合作したといふイロハ歌留多の文句を送つて來たから御紹介する。合作者の氏名は預るがまア怒らずに味はれ賜へかしとのこと、責任は當方にないですから……」

史實の正確を期するために、合作者の一人は大内隆雄であつたことを告白して置かう。そのほかに藤川研一、森信、今井一郎、北尾陽三、北村謙次郎などがゐたやうである。（記憶は些か朦朧としてゐた。）

なほ今日、四十八人中、二人の物故者を出してゐ、虔んで弔して置く。

この餘興的内容の原稿を掲載するのについては、あらかじめ當時の城島新日社長の諒解を求めたのであつた。寒井禮また四十八人中の一人でもあつたし。「宜からう」彼はさう答へた。そこで直ちに、翌朝の紙面に出、さかんなる物議をかもしたり、賑かな長い話題となつたりした。

事の起りは確か數人の連中が「武蔵」あたりで、飲んでゐて、おでん鍋の向ふ側の娘さんをつかまへて「君イロハ歌留多のロを知つてるか？」てなことを言ひ出したのに始まり、それから、新京藝文人を扱つた新作品をこさへようといふことになり、當時の「コルト」「扇芳グリル」等を移動しながら協議討論――秀智を集めてデッチ上げものなのだつた。

以下、本文を寫して置く。

× ×

イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウヰノオクヤマケフコエテアサキユメミシヒモセスン

イ　ろ好みの捨三さん……
ロ　れつの廻らぬ長谷川濬
ハ　んそう宵の今村榮治
ニ　たもの夫婦の牛島一家
ホ　ラで鳴らした森信さん
ヘ　ラ〳〵するのは漫談の今井
ト　んだり跳ねたり磯部秀見
チ　の氣の多い岡益さん
リ　巧過ぎるは木崎龍
ヌ　らりくらりの綠川
ル　ンペンまがひの北尾陽三
ヲ　とこ泣かせの百合子女史
ワ　けのわからぬ赤川理論
カ　んで含める奥村義信
ヨ　ふてくだまく北村謙次郎
タ　めてゐそうな藤山一雄

レ　イ儀構はぬ牧野満男
ソ　ラ向いて行く檀一雄
ツ　かれ顔なる吉野治夫
ネ　ン潮を入れた清三郎
ナ　かず飛ばずの板垣守正
ラ　ク天公子は寫眞の三枝
ム　かし呼らした總一郎
ウ　は氣性なは藤川研一
キ　なか廻りの森武さん
ノ　んべんだらりの上脇進
オ　つとり構へた北小路
ク　ち手十六丁の武藤さん
ヤ　け肥りの恒太郎
マ　たも出ました杉村勇造
ケ　ウ縮居士の清水民生
ブ　ン學を語る長谷川班長

コ　ひ知ひりそめた坂井艶司
エ　ン談前科の高柳
テ　イ操堅固な安達女史
ア　かぬけしない奥一
サ　ケ飲みや鍾鬼の池邊青季
キ　を見て登る大内隆雄
ユ　ウ辯居士の新井錬三
メ　に來た飯田秀世
ミ　かけ倒しの坂巻辰男
シ　んみりとする町原隨筆
エ　ロ談上手は城島社長
ヒ　からびてゐる高原富士郎
モ　ッサリとした逸見猶吉
セ　イ年館長未治郎
ス　みに置けない筒井俊一
京　の夢根岸の夢

第十八章　滿系文學史の展望

本章で、滿系文學への史的展望を試みる。滿系文學の歷史については、各所で語り、また書いて來たが、『觀光東亞』昨年十月號に秋螢の一文「滿洲文藝史話」が出てゐるので、先づそれを見ることとする。

1942.10

滿洲の新文藝はその胎動期から、今日のやうに發展して來た經緯を、若し正確に言へば、二十年餘りの歷史しか持たないので、その成長と發展の過程については、今日に及ぶまでの事情を系統的に述べることは甚だ困難である。その最大な原因は、卽ち滿洲文藝が胎動期よりその後の發展に及ぶまでは殆ど全部が新聞紙のお副へものとしてその生命が支へられてゐて、且その發展して來た徑路は甚だ散漫であつたからである。今日參考になるやうな文獻が殘つて居ない許りでなく、試みにこの二十年年間に辿つて來た發展の足跡を取纏めて、はつきりした輪廓を描き出さうと思つても、恐らくそれは不可能であらう。現に筆者が本文で僅かにその過去及現在の文藝刊行物並に執筆者を概略的に述べられるが、はつきりした歷史的姿態は明晰に書き得ないことを遺憾に思ふものである。

滿洲文藝の歷史を時代的に觀て、大體次の三つの時期に分けることが出來る。卽ち第一は滿洲事變前の東北藩政權時代の文藝、第二は滿洲國建國後の文藝、第三は近年來の所謂滿洲文藝である。滿洲事變前の文藝は、その當時「東北文藝」と稱してゐた。卽ち滿洲が支那の東北に位して居るから當時は「東北文藝」と稱したのであらう。滿洲事變後になつては、もう「東北」などと云ふ人は居ないが、然し適當な名稱が考へつかなかつた。近年になつて「滿洲文藝」と呼ばれるやうになつたが、これは卽ち日本人の云ふ滿洲文學になるのである。次にこれを三つの段階に分けて述べることにしよう。

一、東北文藝

支那の邊陲地方に位して居る滿洲を、試みに歷史的に觀察するなれば、この地域は昔から文化程度が遲れ勝ちな地帶であつて國內一般の文化が如何に昂揚しても、滿洲だけはこの文化運動の激流に卷きこまれるのが常に緩慢であつた。支那の五四、五卅運動は民族解放の二つの偉大なる段階で

あり、そして又文化運動の最高潮時代とも云へよう。文化に關する限り滿洲は常に遲々として進まない地域であるとは云へ、然しこの二度の大きな波のうねりが遂にこの邊陬荒蕪地にまで打ち寄せてきて、時代の激動に伴ひ、新文藝の芽子も自ら萌え出し始め、ぐんぐん生長し來つたのである。

民國六、七年頃まではなほ、舊文學が甚だ盛んであつたが、五四運動の洗禮を受けた滿洲の青年達は、いづれも舊文學の桎梏から解放せられて、試驗的に新らしい形式で文章を書くやうになつて來たのであつた。然しながら當時の作品は、形式と云はず內容と云はず、執筆者達の、舊文學の風格より離脫せんとする、あらゆる努力にも關らず、その幼稚、淺薄さは避け難い事實であつた。これはつまるところ當時は白話卽ち口語體を利用して文章を書かうとしても、語彙の缺乏と作者達に正確な世界觀がないために、僅かに口語體を利用して平凡な故事しか書き得ない。題材選擇の眼識もなければ主題の發揮もなし得ない狀態であり、甚だしいのになると新文章の中に時時舊文學中の慣用熟語等を持ちこんだりして、自ら新しい語彙を創造する力が全然なかつた。

但し初期の新文藝作品が形式上に於て古典華麗難解な舊文句をして平易な親しみ易い言葉に置き換へたことは事實であつて、それらの作者達は一樣に古風な解り兼ねる語彙を使用して事物を表現することを欲してゐなかつたのである。

初期作品の內容は半ば以上は意識的になされを朦朧たる厭味を伴ひ、堅實な觀念がなかつた。故に書かれた文章も均しく抽象的に流れ、眞體的な論據を持たなかつた。

當時の文化運動といふものは、謂はば從來の勢力に對する反抗であつた。だから青年達の書いた文章は、殆どが古來の暗い家庭的の束縛制度と、男女婚姻の不自由とを描いて居る。或は男女の自由戀愛思想に憧れて書いては居るが、そこに選擇された題材があるのでなく、只身邊の微細なる雜事を取扱つて平凡な物語りを綴つてゐるに過ぎない。

これらの初期に於ける文藝の主なる思潮は、總括的に言へば、家庭的の壓迫に對する抵抗、或は戀愛に憧れ婚姻の自由を欲するそれであつた。換言すれば卽ち現實に對する反抗と思想への憧れといふことにならう。

初期の文藝的の刊行物としては、奉天では啓明學會より發行されてゐた『啓明旬刊』と新東學會より發行の『新東』とがあり、吉林に於ては白楊社より發行されてゐた『白楊』があるが、三種共に既に廢刊された樣である。前者は民國十二年頃の出版で其の編輯人は梅佛光氏である。又初期の文藝の典型者としては、奉天にあつては王卓然、吳竹村、朱旗階、王雪影、趙小莫、王捷俠、郝御風等が居り、吉林に於ける白楊社關係の作者には穆木天（該氏は現在中國文壇に重要な地位を占む

る名作家である）劉叉同、何謙人等が居る。『白楊』の創刊されたのがおよそ民國九年頃で、約七回程發行された。この『白楊』と『啓明』とが滿洲文藝最初の文藝團體である。

上記三種の刊行物以外は、恐らく當時の滿洲文藝は何れも新聞紙のおそへものを以て甘んじてゐたのである。

『啓明旬刊』の後を受繼いで奉天に在つては奉天青年會文學研究會と云ふ組織があつた。民國十七年に及んでは春潮社より『漫聲』も發行された。『漫聲』は僅かに一回ぎりではあつたが、然し過去の文藝陣容に較べると、著しい進歩が見られる。春潮社の幹部同人としては周伏雯、周哲等が居つて、この團體には、南滿各地の會員に限らず、北滿地方の文學青年も多數含まれて居た。そして『漫聲』廢刊後に於いても尙此等會員達は矢張り長い間ずつと活動をつゞけてゐた。

大連では大連青年會から『青年翼』が發行された。內容は純文藝雜誌ではなかつたが、然し文藝に對しては多少の貢獻がないでもなかつた。其の他新聞紙のおそへものとしては、例へば「奉天民報」「哈爾濱公報」並に「晨光報」等何れも文藝作品を多量に登載した。民國十四年より十六年迄の間には、支那革命の勢力が漸次滿洲內に侵入して來た。この新らしい勢力は若干の新文藝讀物をも滿したので、その當時は新文藝が東北に於て逐次に領域を擴大し、奉天では更に「東北文學研究會」なる組織もあつて王一雲氏がその中堅であつた。

出版方面では、東三省文藝編譯社より出版された『小說新刊』なるものがあつた。これは久しき間に亘つて發行されてゐたが、內容を檢討すれば、殆ど新舊文學が雜然と掲載されてゐて、文藝の選錄に新又は舊の觀念が乏しく、文語體並に口語體文の小說を載せ、又舊詩舊詞をも載せて居た。新文藝の創作に就て若しその內容意識を檢討すれば、矢張り舊小說中の才子佳人のローマンス的事柄を脫しては居ない。故にその『小說新刊』なるものは、當時の滿洲文藝運動の代表的出版物とは認め られないのである。

外に關外社より出版されてゐた『關外』なるものは、生氣を充滿した純文藝雜誌と云へるが、又眞に新文藝途上を邁進する強軍とも云ふべきであつた。『關外』に載せられた作品は未だ完全に初期的作品の幼稚性を脫して居ないとはいへ、その作者等は確かに「文學は人生の表現なり」と云ふ事を洞察してゐたらしい。だから其の書かれた文章の意識上に於ては確かに進歩したと云ひ得るのである。

當時の滿洲社會の情況は、一方に於いては外力の壓迫を受けて居り、內面に於いては少數の軍人及び政客達が極端な縱慾生活を營み民衆は如何かと云ふと、その多くは困苦缺乏、饑寒の生活をし

て居た。だから多數の作者達が、好んで取上げる作品の題材は、大半が殆ど軍人政客達の野蠻な振舞と社會の暗黑並に農村の蕭條さであつた。

其の外に淺薄なる戀愛物語りを書く人々も居つた。當時に於いては一般の青年等は何れも舊禮教の束縛から迅速に解放されんことを唱へて居る。事實自由戀愛と云ふのは舊禮教より視れば絶對に許されない事柄なので、舊禮教の壓迫に對し積極的に攻擊して居る。そしてもと〳〵自由戀愛と云ふのは青年達の憧れであるから、當時書かれた文章の殆どは女に關するロマンス的なこと許りであつた。

これは卽ち作者達の新文學に對する修練がまだ〳〵缺乏して居るのを示すものである。故に作品の風格等は均しく素樸簡略でその言葉遣ひも自己の使ひ慣れた言葉だけをならべて、單純な故事を表はして居るといふ風で、斯樣な狀態は殆ど當時一般の作者の通弊になつて居た。例へば『關外』第四輯に載せられた卢憲月氏執筆の『刼後』の如きも、其の內容は匪賊達が或る圓滿家庭を破壞、離散させる徑路を描き、以て役所、官吏等の無能振りと野蠻な振舞とを現はして居るのだが、これらを表現する言葉遣ひは假に贅言は求めずとも、餘りに簡略單純であつた。然し乍ら當該作品は當時の幼稚な文壇上にあつては確かに佳作の類に屬して居ると云へよう。

尙同じ作者の第九期『白雪』に發表した『囚徒の情文』と云ふのは往復書翰類の形式を以て、或る人が或種の權威の壓迫を受けて種々殘酷なる待遇を受けて居る有樣を描いて居るが、讀者をして作者の熱情が字裡行間より迸るかの樣に覺えしめると共に、人々の感情を激昂に導きもする。其の他梅山客、旋風等も秀れた作品を書く作家である。

『關外』は創作方面許りでなく、文藝理論の紹介にも非常に盡力した。尙新詩も澤山掲載せられて居るが、これらは然し形式上に於ては矢張り舊詩の風格を離脫して居ないのである。

『關外』と『小說新刊』の外に、當時に於いては又『長虹』『夜航』『浪花』等の雜誌があつたが、いづれも長期の發展を得ずして短い生命で終つた。

これ等雜誌の外に、各新聞紙の副物にも從前より逐次新文藝作品を載せるやうになつて、奉天新民晚報の『文學週刊』並に東三省民報の『文學副刊』等の如きは殆ど何れも文學を以て主體として居る。

個人が出版した蒐集卽ち單獨本は、夏孟剛氏著『寂寞之友』及李殿儂氏著『靈魂』と、云ふのがある。『寂寞之友』の內容を通觀するとその題材が低級である許りでなく、形式も非常に陳腐である。

民國十七年頃の滿洲の文藝は、顯著な二種の思潮に依つて形成されてゐる。本來から云へば滿洲